

麴町の大火「1850年（嘉永3年）」

「麴町の大火」とは、1850年（嘉永3年）2月5日、火元である麴町から芝増上寺周辺にまで燃え広がった火災のことをいう。

このかわら版は、本火災において麴町・永田町・外桜田・霞ヶ関の地に設けられていた、武家屋敷の焼失の様子を絵図で表すとともに、火災の状況が詳細に文字で記されている。

しかし発刊されてから150年以上も年月が経っているため、文字が消えていたり、薄くなっているため、判読できない所がある。

このため本火災の状況を、斎藤月岑が刊行した『武江年表』（主として江戸における風俗・事件・災害・地誌などに係わる事項を記した書籍）から転記することとした。

「嘉永三年（1850年）二月五日晴天、乾（北西）大風土砂を飛ばす。巳刻（午前10時）麴町五丁目続き岩城升屋の後なる、高田放生寺の拝借地に在る見守番人の家、炭團屋より出火して、烟西東南に被り、一時に焼広がり、黒烟天を焦がし同所（麴町）五丁目より一丁目まで、隼町、平河町、山本町、谷町邊（以上に記された町は、およそ麴町周辺の町人地）。

又武家地多く焼け、定火消し御役屋敷（半蔵御門前火消屋敷）、京極候、明石候、三宅侯、大村候、鳥居候、山王門前町屋（山内は恙なし）。内藤候、井伊候、細川候等の御屋敷類焼に及ぶ。

藝州候は別條なし、夫より黒田候、内藤候、九鬼候、丹羽候、柳沢候より外桜田へ飛で、京極候、木下候、相良候、御勘定奉行御役屋敷、加藤候、朽木侯、兼房町、和泉町、備前町、伏見町、鍛冶町の邊（以上に記された町は、およそ新橋周辺の町人地）、愛宕山本社二王門額堂、末社別當所末寺、同所麓東西大小名屋敷一圓、眞福寺、天徳寺、同門前青松寺へ焼込。

増上寺は院支院数宇焼け、神明社濱の大久保候より金杉橋、松平因州侯下屋敷、其外柴井町、宇

田川町、神明町、三島町、七軒町、中門前、片門前、濱松町、新網町、湊町、西應寺町、同朋町、濱町、金杉一丁目より五丁目邊の町屋一圓（以上に記された町は、およそ増上寺周辺の町人地）、圓珠院、王傳院、安樂寺、傳覺寺其外此邊の寺院類焼して、芝橋際迄濱手に至り、夜戌下刻（午後9時）漸に鎮火せり。會津候、仙台候、新銭座（しんぜにぎ、芝に設けられていた貨幣鑄造所）は残る。

諸侯の藩邸五十二宇、小名九十二宇、町院十九宇の餘、町数五十七町なり、長凡三十三町餘（およそ3.6km）、幅廣狹平均して四町の餘（およそ400m）と聞り。焼死怪我人数ふべからずとぞ。」

以上が、本火災の被害状況である。

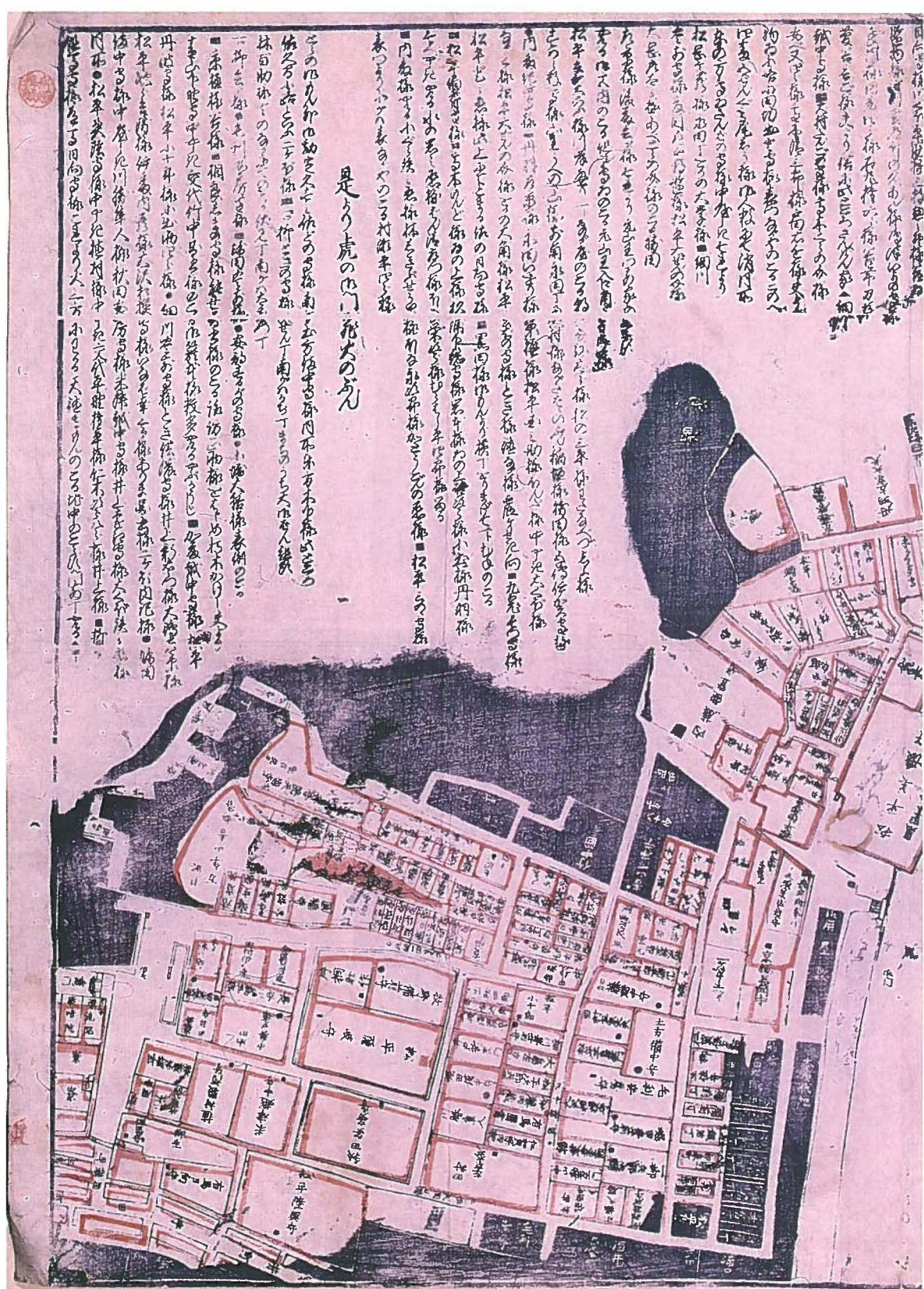
この火災で、本かわら版の右端下の内堀際に記されている、「定火消の屋敷（半蔵御門前火消し屋敷）」が焼失している。

定火消とは、幕府直轄の消防組織として、『明暦の大火（1657年（明暦3年）1月18日に発生。当時の江戸の町の大半を焼き尽くし、死者107,000余人）』を契機として、翌、1658年（万治元年）9月8日、江戸城を火災から護るため、4,000石以上の旗本をもって、江戸城周辺に創設された火消のことをいう。

定火消は創設当初は4組であったが、その後幾多の改廃を経て、1704年（宝永元年）には10組となった。このことから定火消を別名、「十人火消」とか「十人屋敷」と呼んでいた。本かわら版の絵図のうちほとんどを、大名屋敷が占めているが、これは当時武家地が、江戸の土地の7割を占めていたことを示す左証である。

絵図の中で広く書かれている大名屋敷もあれば、小さな屋敷もあるが、屋敷の広さは、大名が受け取る石高によって決まっていた。

白井 和雄（元東京消防庁 消防博物館長）



「嘉永三年麹町八丁目より出火」 (東京大学地震研究所蔵)

德壽

五